

番組審議会議事録（第10回、平成29年7月12日開催）

1 開催年月日：平成29年7月12日（水）

2 開催場所：私学会館 アルカディア市ヶ谷（5F 赤城）

3 委員出席

委員総数 9名

出席委員数 7名

出席委員の氏名：岡田裕介（東映株式会社 代表取締役グループ会長）、

足立盛二郎（前公益財団法人 日本棋院理事、

元ゆうちょ銀行取締役兼代表執行役会長・日本郵政取締役）、

野田慶人（日本大学 芸術学部 学部長）、

中村幸雄（オフィス・サンライズ 代表、

元株式会社損害保険ジャパン 代表取締役専務・監査役）、

金子光男（公益社団法人日本将棋連盟 学校教育アドバイザー 大学担当
学校法人明治大学 監事）、

小川誠子（囲碁棋士／公益財団法人日本棋院 理事）

清水市代（将棋女流棋士／公益社団法人日本将棋連盟女流棋士会会長）

欠席委員の氏名：兵頭俊夫（大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構
物質構造化学研究所特別教授）、

音 好宏（上智大学 文学部 新聞学科 教授）、

放送事業者側出席者名：岡本光正代表取締役社長、勝股信昭相談役、倉元健児取締役、

驛田雅文業務部部长、遠藤 健業務部課長、高田智子、小松美怜

4 議題

- ・生放送（2017年前半実績）について
- ・藤井聡太四段関連番組について
- ・特別番組について

5 議事の概要

(1) 生放送（2017年前半実績）について

2017年前半に放送した番組の中から、生放送を紹介。

「ワールド碁チャンピオンシップ」（2017年3月21～24日）

「第3回 日中竜星戦 JAPAN2017」（2017年4月29日）

「Future of Go Summit 柯 潔九段 vs アルファ碁」（2017年5月23、25、27日）

「第10期 マイナビ女子オープン五番勝負」（2017年5月16日）

(2) 藤井聡太四段関連番組について

「情報番組 将棋まるナビ」(2017年4月29日)

「第30期竜王戦 決勝トーナメント 増田康宏四段 vs 藤井聡太四段」

(2017年6月26日 生放送)

(3) 特別番組について

「GO・碁・ジャパン応援企画第2弾 これぞ世界の碁！」(2017年3月17日)

「第5回 電聖戦」(2017年5月28日)

「女流棋士の知と美 ～香川 vs 室谷～」(2017年7月30日放送予定)

6 審議内容

(1) 生放送(2017年前半実績)について

- (放送事業者)生放送ですが、藤井聡太四段の対局を朝10時から夜10時まで、12時間通して生放送しました。その際、聞き手がイベントのように笑いながら楽しそうにやっている点について、「真剣にやっているのに、楽しそうにやるのはいかなものか」と視聴者からご意見がありました。
- (小川委員)生放送を見ていたが、将棋については詳しくないので、かえって楽しくて良かった。技術がなくても見ている視聴者がいるわけなので、知っている方、知らない方でも楽しく見ることができるので、違和感なくとても良かった。
- (小川委員)やはりタイトル戦だと、通常の対局とひと味違う。
- (足立委員)生放送が非常に増えてきた。数年前からと比べると囲碁・将棋チャンネルの魅力アップにすごく貢献している。このまま進めていくのが良いことではないか。
- (野田委員)生番組で特に感じるが、音の部分のこもり、聞きづらさがすごく目立つ。いい番組は目立たないものもあるが、たいていの番組はこもっているし、逆に聞きづらいし、これなら音がない方が良くと思う人もいるのでは。音の処理をきちんと対応した方が良いのではないか。
- (放送事業者)音の処理については、今後課題として検討していく。藤井聡太四段の声が小さく聞き取りにくい箇所があるが、今度の7月29日(土)に放送する特番では、ロケで仕方がないため、テロップ処理で対応し制作している。

- (放送事業者)藤井聡太四段に関しては、対局が非常に注目されている。ただ、対局日程が決まるのが2週間前のため、2週間前から編成を急遽変更して対応している状態。藤井聡太四段はまだ注目が続きそうなので、今後もしばらくは生放送していきたい。
- (野田委員)藤井聡太四段をデビュー前から追いかけているというのは、かつてNIKEではタイガーウッズ選手をデビュー前から追いかけていて話題になったけれども、そういう意味ではすごいことだと思う。ただ、これだけ話題になると他の各社も追

いかけていき、独占契約の話が出てくると思うが、将棋界は大丈夫なのか。ずっと追いかけて続けられるのか。

- （放送事業者）基本的には棋戦ごとに権利がある。
- （野田委員）藤井聡太四段とはすでに契約してるのか。問題ないのか。
- （放送事業者）将棋連盟と契約を結んでいるので問題ない。例えば、弊社の棋戦「銀河戦」の来期に初めて予選に出場する。これまで予選は放送したことがなかったが、生放送をする予定（7月27日（木））。
- （野田委員）そういうことで全部できるのであれば良いと思う。せっかく追いかけているのに、他社にやられてしまっは意味がない。
- （放送事業者）いわゆる非独占で29連勝目の「竜王戦」は読売新聞社主催で、AbemaTV、ニコニコ動画でも放送しているが、それは仕方がない。

(2) 藤井聡太四段関連番組について

- （放送事業者）弊社スタッフと話している映像や、母親が見せてくれた資料など面白い映像がたくさんある。それらをダイジェストにまとめて、7月29日（土）から急遽「藤井聡太～取材ノート～」と題して特番を組んだ。今後も藤井聡太四段に絡んだ番組を制作していきたいと思っている。
- （中村委員）数年前の視聴者の層と最近の視聴者の層では随分見ている方が変わってきているのではないか。将棋の好きな方、知らない方、女性、年配の方で見る層が変わってきているので、分析ができれば良いと思うのがひとつ。さきほど、聞き手が楽しそうにしている真面目ではないということに関して、周りの女性の方は、テレビをつけっぱなしにして洗濯したり料理したりしながら、お昼になると何を食べたのかとテレビを見るような方もいる。そういう面でも視聴者の層が変わってきていると思うので、100%全ての人に満足してもらうことは難しいが、どういう番組編成にしていくかは見ている層を分析できれば良いと思う。かなり視聴者が増えているのは事実だと思うし、耳にも入ってくるので、その点が参考になればと思う。

(3) 特別番組について

- （放送事業者）囲碁では国際棋戦に力を入れて取り上げているが、どうしても日本が負け続けていて、番組が暗くなりがちなのではないかということで、真面目にやるよりも番組をもっと明るくしていくべきでしょうか。前回の審議会では岡田委員長からもっとヒールを際立たせた方が良いとご意見をいただいたが、なかなか難しい状況で現在模索中です。
- （岡田委員長）この囲碁の国際棋戦の問題に関して、明らかに日本が弱い。これは認めざるを得ない。だから、弱いけれども「今度こそ頑張れ！」と応援したくな

るような見せ方をしないといけない。中国、韓国と同等の扱いをしてはいけない。こんなにも負けている状況では。勝ったことの方が珍しいのだから。

他のスポーツでは、例えばテニスでは錦織圭選手を「今回はここまでいかないか」とか、サッカーでも野球でも同等の扱いをしていない。放送する側が、同等に見ていない。それで良いと思う。そうやっていくことが「頑張れ！」の応援に繋がり、視聴者を増やしていくのだと思う。だから正直にあるべきで、ひたすら何か隠したり、棋士に気を遣ったりするのではなく、弱いということを認めていくべき。たまたま将棋は日本のルールであるので、囲碁は多少違えど、世界で通用するルールで国際的であるので、将棋を世界に普及させることは大変であるが、囲碁はそうではない。囲碁でトップになるよう、そのためにはどうしたら良いか、そういう目を持っていくべき。負けて落ち込むというのが弱さを認めていない。

- (小川委員) 昔、日本は囲碁で一番の時代があったので、ご覧になっている方がその時のことを覚えていて、弱くなったと感じているのではないか。前は武宮九段他、色々な棋士が一番になったことがある。
- (放送事業者) 昔、日中スーパー囲碁・NEC杯があった。「竜星戦」のようにパラマス方式で勝ち進む対抗戦で、武宮九段が7人抜きなどで勝ち進んでいたが、鉄のゴールキーパーと呼ばれた聶衛平(ジョウ エイヘイ)に敗れた。30年前は武宮先生、小林先生、大竹先生が活躍されていた。武宮先生は中国でも人気が高い。その時代に比べて弱くなったと感じる方がいるのでしょうか。
- (岡田委員長) むこうが弱かったのか。
- (小川委員) それから中国と韓国が国で力を入れていったので、今の強さがある。
- (放送事業者) いずれにしても、弊社では「中国竜星戦」のプロの棋戦を放送しているが、2018年の冬季オリンピック・パラリンピック終了後に、韓国のプロの棋戦「韓国竜星戦」を開催することで韓国棋院と調整している。100名ほど出場予定で、本戦トーナメントになった時点から放送する。「日中竜星戦」としているが、いずれかのタイミングで3か国の竜星戦を立ち上げる予定。日中竜星戦は3回とも中国が勝っているが、どこかで日本がトップになるようやっていきたい。
- (金子委員) ヨーロッパから強い選手が出るのはまだ考えられないか。
- (小川委員) まだまだではないか。
- (金子委員) 柔道では日本がオランダのヘーシンク選手負けて、皆落ち込んだが、国際的になり柔道の面白さで広まっていった。そういうことと同じようなことが起きているように感じる。どうして中国、韓国は強くなっていったのか、聞いてみたいし教えてもらいたい。番組として出来るか分からないが。
- (放送事業者) 今後検討していきたい。
- (金子委員) 大学の学生らからよく聞かれるのが、どうして藤井聡太四段が強いのか、と聞かれることがある。将棋を指さない人でも興味を持って聞いてくる。そ

ういうことを知りたいという潜在需要があると思う。

- (野田委員) 素人なので分からないが、AI、AI と言いきすぎなのではないか。人と人が戦うから意味があるのであって、AI はどんどん開発されてデジタル的に集約して作っていくわけで、上へ上へと進化していくのは決まっている。AI と人は話題性としては意味があると思うが、それ以上はあまり意味がないと思う。あまり大騒ぎしないような作りの方が見る人は喜ぶのではないか。どうして人間が負けるのかという話になってきて、おかしなことになる。それなら AI と AI を戦わせる方をメインにした方が面白いのではないかと思う。私は素人なので、よく分からないが、その二つが一般論として気になった。
- (放送事業者) 次の「第 5 回電聖戦」と絡む件だが、第 6 回以降は弊社が引き継いでやっていく。AI と AI というところでは、「AI 竜星戦」を今後立ち上げて特番化していく予定なので、その際に委員のご意見を参考にさせていただきたい。
- (野田委員) ただ、それに意味があるのかということはある。AI 同士で戦わせて、視聴者は喜ぶのか。やはり、人が考えながら色々やることを見るのが楽しいのではないか、という気がする。デジタルの時代でしかたないが、あまりにも AI が No.1、AI 絶対という風潮で作らない方が良いのでないか。
- (足立委員) AI 問題の扱い方について同じ考えである。AI と対面して打っているのを見ると、机の上にパソコンが 1 台あるだけで、アウトプットだけのためのパソコンで背後には何千台というパソコンがある。そういう AI と戦うとはどういう意味なのかということが分かっていないのではないかと。1 局対局するのに電力代が 80 万円ほどかかる、そういった壮大なシステムと戦いである。そういうことを視聴者にも教えていくことが AI と戦うことはどういうことなのか、AI と戦うという意味を教えることになる気がする。ただ AI と戦う勝ち負けだけを面白く放送するだけではどうなのかと思う。一度、AI と戦うということはどういうことなのか、ひとつの番組として放映する意味はあるのではないか。
- (金子委員) 逆にそのことによって人間のすごさが際立ってくると思う。そちらの方が大きいのではないか。負けても。
- (清水委員) 地方に行ったときに囲碁将棋チャンネルを楽しみにしているファンの方からいくつかご意見をいただいた。その方は囲碁の番組を大変楽しみにしている方で、解説者の委員がだんだん中央に出てきてしまうので、解説としては良いが、盤面全体が見たいのでストレスが溜まるという。また、最後の形勢判断で「〜ロ」が良いですと聞こえて、シロかクロか聞き取りにくい場合もあるようです。
- (金子委員) 囲碁・将棋チャンネル以外にもコンピュータ上では色々なチャンネル

があって、ニコニコ動画などとの競合観点についてはどうなっているのか。商売上、脅威になる競争相手なのか。そういう競争相手ができることによって、ファンをお互いを振り落としてというような関係になりうるのか。

- (放送事業者) 基本的には先方は無料で、こちらは有料で放送しているので、そういう意味ではまずい面もあるが、逆に言うと、こちらでしか見られないものを確保していけば、将棋が普及してくれることによってメリットはある。AbemaTVには将棋連盟から頼まれたこともあり、番組を売っている。制作もご依頼いただいている。共存できることが一番良いと思う。それによって将棋を見る人が増えれば弊社の独占素材がある限り良い。ですから独占素材を増やそうという意識はある。
- (岡田委員長) 基本的にその問題は独占と非独占ということではなく、全体のπが増えるかどうかの話だと思う。たくさんところで放送して、そういうことに触れる機会が多ければ将棋をやる人も増えるだろうし、囲碁を増える人も増えるだろう。だから囲碁や将棋に慣れ親しむためには、独占であるから絶対に良いということではない。AbemaTVがなぜ将棋を放送したかという、藤田社長が好きだから。また角川社長も将棋が好きだから。そういう基本的にオーナーの趣味から始まったが、それでも良いと思う。それが広まってくれたら。AbemaTVは将棋を放送したからといって収益的に良いわけではないが、放送していたら藤井聡太四段が登場したという、これが一つの運があったこともある。大スターが誕生したわけだから、それを活用してというのは変だが、放送界もインターネット界も囲碁・将棋チャンネルを広めていくためには、それでやっていくのが大事なことだと思う。将棋界には加藤一二三九段も登場し、あのバラエティー性は広める大きな要素であろう。そういう意味で囲碁・将棋チャンネルは独占ということではなく、会員数を増やすこと、導く方法を会社として考えていくべきではないか。会員数を増やしていくことがすごく大事なことだと思う。
- (放送事業者) いま考えているのは、最終的に囲碁と将棋を分けたチャンネルをやるべきだと考えている。囲碁・将棋チャンネルはそのままやるが、来年頭に囲碁と将棋を分けたチャンネルをネットで立ち上げることを考えている。
- (岡田委員長) ネット回線が余っているのか。
- (放送事業者) ネットであるので。どういうことで出来るか分からないが、次回の番組審議会ですべてのことでやるかご報告ができると思う。

以上